



大学共同利用機関法人

人間文化 研究機構

要覧2021

Inter-University Research Institute Corporation
National Institutes for the Humanities



人文機構

<https://www.nihu.jp/>

CONTENTS

機構長あいさつ

設立の経緯と目的・人文機構基金へのご寄附のお願い	1
人文機構のビジョンとミッション	2
人文機構の組織—運営管理体制—	3
総合人間文化研究推進センター (CTI)	4
総合情報発信センター (CIP)	8
国際連携	11
大学院教育／共同利用・共同研究	12
各機関の活動	14
資料	20



機構長のあいさつ

21世紀における人類にとってもっとも重要で緊急の課題は、人類の存続と共生です。環境問題・資源枯渇そして感染症など多くの困難がある中で、人類は地球上でいかに存続し、戦争・暴力・差別・貧困などに抗して、いかに共生していくのかが問われています。

それらの問題を根源的に解決する鍵は、人間文化にあります。人間文化に関する学問は、人間・文化・社会・自然を対象とします。人文学とは「人間とその文化を総合的に探求する学問」であり、総合性が本来の人文学のあり方です。今、人文学の細分化が著しい中、「人間とその文化」を俯瞰することのできる奥行きと広がりをもった研究の総合化に基づく「分厚いヒューマニティーズ」が強く求められています。それが文と理を超越した知の総体としての「人文知」です。人文知によって俯瞰することで、科学や技術などの専門知を人間とその文化の中に正しく位置づけなければなりません。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構は、法人第3期（2016年4月～2022年3月）において、本機構を構成する6機関がそれぞれの学問領域で蓄積した文化資源とネットワークにより、研究基盤を拡充させつつ最先端研究を推進し、高度の専門性を追求して国内外における中核研究拠点として機能を高めてきました。また、6機関が中核となり、国内外の大学等研究機関や地方自治体・産業界などと連携し、現代的諸課題の解明に資する16の大型共同研究「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を試みてきました。

法人第3期の最終年を迎え、改めて冒頭に掲げた21世紀における人類にとっての重要課題に対して人間文化研究機構を含めた日本の人文学が世界に向けて発信できる意義あるコンセプトは、「真の豊かさを問うこと」「自然と人間との調和」そして「平和の創出」であると強調しておきたいと思います。

皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

2021年4月



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

機構長 平川 南

設立の経緯と目的

大学共同利用機関とは、各研究分野における我が国の中核的研究拠点（COE）として、個別の大学では維持が困難な大規模な施設設備や膨大な資料・情報などを国内外の大学や研究機関などの研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構（人文機構）は、2004年4月1日に設立され、当初は、国立歴史民俗博物館（歴博）、国文学研究資料館（国文学研）、国際日本文化研究センター（日文学研）、総合地球環境学研究所（地球研）および国立民族学博物館（民博）の5つの大学共同利用機関で構成されていました。2009年10月1日には、新たに国立国語研究所（国語研）が加わり、現在は6つの人間文化にかかわる大学共同利用機関によって構成されています。人文機構は、これら6つの研究機関が、それぞれの設立目的を果たしながら基盤研究を進めるとともに、学問的伝統の枠を越えて相補的に結びつき、自然環境をも視野にいたした人間文化の研究組織として、大学共同利用の総合的研究拠点を形成するものです。

人文機構基金へのご寄附のお願い

現在、世界各地において、戦争・環境・都市・宗教・民族など、社会的、精神的な問題は、人間の根源的崩壊さえ招きかねない状況にあります。この世界に対して、「真の豊かさを問うこと」「自然と人間との調和」そして「平和の創出」といったコンセプトを発信することが、これからの人文学、さらに文と理を超越した知の総体としての「人文知」の目標と考えています。

この3つのコンセプトを皆様とともに発信していくために、「人文機構基金」へのご寄附を通じて、当機構の諸活動に温かいご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

人文機構基金は、人間とその文化を総合的に探究する人文学の発展に関心をお寄せくださる皆様に、人間文化研究機構および機構を構成する6つの大学共同利用機関の活動にご寄附を通じてご参加いただくための基金です。

詳細は次の URL をご覧ください。

<https://www.nihu.jp/ja/about/donation>



人文機構基金

<https://www.siscloud-kifu.jp/as-dr/dre002/dre00201init/>



表紙：「伊勢物語絵巻」
国文学研究資料館所蔵

人文機構のビジョンとミッション

地球上における人間と自然の共存、世界のなかでの人間同士の共生という、21世紀における人類のもっとも重要で緊急の課題に根本的な解決への鍵を提供できるのは、人間文化研究です。科学技術一辺倒ではなく、健全で豊かな社会の発展には人間文化のあり方を見直すことが不可欠で、その指導的立場を人文機構が担っていかねばなりません。

人文機構は学術専門分野・社会・慣習の壁を越えて人間の蓄積してきた知識・伝統を創造的に再構築して、真に豊かな生活の実現に向けて、問題解決を志向する人間文化研究の新しいパラダイムを提唱することを任務と考えています。

ビジョンを達成するための役割・使命として6つの機関が共有するのは「総合性」「研究・教育の卓越性」「共同利用・共同研究の高度化」「社会連携・社会貢献」の4つのミッションです。

グローバルな中核的研究拠点であるとともに、社会文化の変化に対応できる教育研究組織作りにも貢献します。

研究・教育の卓越性

人間文化研究機構のミッション

大学の国際的研究能力の強化促進の支援とそのための研究環境を整備します。その一環として教員の流動性を促進する環境を整備します。

共同利用・共同研究の高度化

価値の多様性を認めつつ、人間とその文化を統合的にとらえる方法論を提供して、社会発展、創造的主体育成に貢献します。

総合性

情報発信・広報機能を強化して人間文化研究の成果を普及します。また、産業界等との連携により社会貢献・情報発信事業に取り組みます。

社会連携・社会貢献



人文機構の組織 — 運営管理体制 —

第3期における機構のガバナンス（協治）機能をさらに強化するため、「総合人間文化研究推進センター」と「総合情報発信センター」を設置しました。

総合人間文化研究推進センターは、6つの機関の相互連携を深めつつ、国内外の大学等研究機関と連携して、「基幹研究プロジェクト」を推進します（4～7頁参照）。

総合情報発信センターは、機構に所属する研究者の情報やその研究成果、6つの機関が持つ貴重な史料・資料などの研究資源を可視化させることで人間文化に関する知を統合するとともに、国内外の研究者コミュニティや社会に向けて広く発信する拠点です（8～10頁参照）。

これら2つのセンターを含めた機構の組織、運営に関する重要施策の策定、調整に必要な調査・審議を企画戦略会議（経営協議会、教育研究評議会のメンバーを中心に構成）で行います。さらに機構長室を機構長の直下におき、機構長が指示する特命事項を迅速に処理します。



総合人間文化研究推進センター（CTI）

総合人間文化研究推進センターは、2016年度から6カ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指しています。基幹研究プロジェクトは、(Ⅰ) 機関拠点型、(Ⅱ) 広領域連携型、(Ⅲ) ネットワーク型（地域研究および日本関連在外資料調査研究・活用）の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用を図る計画です。

また、総合情報発信センターと連携して推進する「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」に加え、2018年度から新たに「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」に取り組んでいます。



I 機関拠点型 基幹研究プロジェクト

6つの機関が、それぞれのミッションを体現する重点的な研究テーマを掲げ、国内外の研究機関や研究者と連携し、専門分野の深化を図る挑戦的な研究に取り組みます。

国立歴史民俗博物館

総合資料学の創成と日本歴史文化に関する
研究資源の共同利用基盤構築

国内外の大学等研究機関や歴史民俗系博物館等と連携して、歴史・文化資料等を文理を超えた様々な学問的視点から分析できるように、相互利用環境の整備を行っています。それらの資料を活用することで、新たな知や日本歴史像の発見につなげる「総合資料学の創成」プロジェクトを展開しています。

国立国語研究所

多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓

国内外の大学等研究機関と連携し、現代語、古典語、方言、日常会話、学習者の日本語など、日本語研究の基礎データとなる大規模な言語資源を整備し、大学および研究者コミュニティに提供します。それらの多様な言語資源を多角的なアプローチで分析し、様々な研究領域を融合させることによって新たな総合的日本語研究のモデルを開拓するとともに、国際的な研究連携を行うことで、グローバル化社会における日本語研究の国際化を促進します。

総合地球環境学研究所

アジアの多様な自然・文化複合に基づく
未来可能社会の創発

多様な自然、文化、価値観、世界観を有し、急速な経済成長を遂げる一方で地球環境問題のホットスポットでもあるアジア地域を主な対象として、「アジアの多様な自然・文化複合に基づく未来可能社会の創発」を目指す総合的研究を実施しています。学際的な異分野融合にとどまらず、地域や行政などの社会と連携しながら、課題解決型の研究及び社会実装につなげる超学際的なアプローチを推進し、地球環境問題解決に資する新領域の創成を担っています。

国文学研究資料館

日本語の歴史的典籍の

国際共同研究ネットワークの構築（歴史的典籍NW事業）

日本語の歴史的典籍全般を研究資源として、国内外の大学等研究機関と連携し、人文科学の枠を超え、自然科学をも包摂した異分野との融合研究を推進します。また研究基盤整備として、約30万点の日本語の歴史的典籍を画像データ化し、既存の書誌情報データと統合させたデータベースを構築しています。

国際日本文化研究センター

大衆文化の通時的・国際的研究による

新しい日本像の創出

日本文化全体を構造的・総合的に捉え直すため、大衆文化の通時的・国際的考察に取り組み、その考究を通じ、日本文化の基層と多様性を包括的に捉えて、新しい日本像と文化観の創出に貢献します。また、関連資料を幅広く収集してデジタル化・DB化を行い、メディアミックスの画像・音響図書館を構築して世界に発信し、国内外の大学等に向けて研究資源や研究・教育パッケージを提供します。

国立民族学博物館

人類の文化資源に関する

フォーラム型情報ミュージアムの構築

民博が収蔵する文化資源について国内外の大学・博物館等研究機関の研究者や現地社会の人びとと共同研究を行い、その成果を多言語化し、発信するとともに、その情報についてインターネットを通して意見交換ができるフォーラム機能をもつデータベースを構築しています。このデータベースを活用することによって、文化資源に関する情報を世界中の人びとと共有し、共同利用することを目指します。現在、「中央・北アジア資料」、「東南アジア資料」等に関する計24件のデータベースが公開・制作進行中です。

II 広領域連携型 基幹研究プロジェクト

歴史、文学、言語、地域研究、環境等の専門分野を擁する機構の6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指します。

▶ 日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築 地域文化の再構築

日本列島では現在、地域社会の変貌や災害によって、その多様性が失われつつあります。本プロジェクトは、こうした現状がもたらす諸問題の解明に向けて、言語・資料保存・表象システム・環境保全等を切り口として、地域社会とそこでの拠点形成をめぐる、地域にかかわるさまざまな人々との実践的な議論を積み重ねることを通じて、地域文化の再構築を目指します。

ユニット	実施機関	代表
地域における歴史文化研究拠点の構築	歴博 【主導機関】	(統括代表) 小池 淳一 (ユニット代表) 川村 清志
方言の記録と継承による地域文化の再構築	国語研 【主導機関】	(統括代表) 木部 暢子 (ユニット代表)
日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築	民博	日高 真吾
人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究	国文研	渡辺 浩一
災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生	地球研	吉田 丈人



▶ アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開 エコヘルス

「エコヘルス」は従来、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探求しようとする新たな研究の視座です。本プロジェクトは、特にアジア地域の環境と健康をめぐる問題や、歴史的な「健康」概念の考察等を通じて、人間文化研究の観点から地域に根ざした学際的「健康」研究に取り組み、アジアのエコヘルス学と研究ネットワークの創成を目指します。

ユニット	実施機関	代表
アジアにおける健康と環境：新たな人間と環境との関係性としての「エコヘルス」概念の再構築に向けて	地球研 【主導機関】	ハイン マレー
アジアの中の日本古典籍 —医学・理学・農学書を中心として—	国文研	入口 敦志
文明社会における食の布置	民博	野林 厚志



ラオス・サワナケート省における日中ラ3か国による共同調査



第二回アジアエコヘルス研究フォーラムにおけるプロジェクト代表による基調講演

▶ 異分野融合による「総合書物学」の構築 総合書物学の構築

古来伝わってきた書物（歴史的典籍）には、内容はもとより紙、墨、装訂法など様々な情報が蓄積されています。これらを読み取り、先人の知恵を掘り起こすべく、従来の国文学のみにとどまらず、あらゆる分野と連携して総合的な観点から書物を分析し、書物の意味の問い直しや、書物が持つ可能性を探ります。主導機関である国文学研究資料館がユニット間および、機関拠点型基幹研究「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワークの構築」を連携させる総括事業を推進し、研究成果を総合的な教育プログラムへと集約して、新たな学問分野「総合書物学」の構築を目指します。

ユニット	実施機関	代表
総括事業の推進	国文研 【主導機関】	藤實 久美子
古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究	歴博	小倉 慈司
表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化	国語研	高田 智和
文化・情報の結節点としての図像	日文研	山田 奨治



Ⅲ ネットワーク型 基幹研究プロジェクト

世界における日本や社会・文化を考える上で重要な課題を掲げ、国内外の大学等研究機関とネットワークを形成し、多様な分野を横断する総合的な研究に取り組みます。ネットワーク型基幹研究は、「地域研究」と「日本関連在外資料調査研究・活用」から構成されます。

地域研究 地域研究

日本の文化、社会、政治、経済、環境にとって重要であるにもかかわらず、総合的な研究が十分でない3つの地域を対象に調査研究を行い、日本と対象地域間の相互理解を促進します。

北東アジア地域研究

中心テーマ「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」

日本と中国・ロシア・モンゴル・韓国・北朝鮮を一体的に捉える「北東アジア」は、当該国間で生起する諸課題の解決にとって重要な地域概念です。北東アジアにおける「越境」をめぐる諸現象を解明し、政治的・経済的な対立面と同時に、そこに生成する新たな「共生」の地域像を導き出します。

研究拠点	研究テーマ	代表
【中心拠点】 国立民族学博物館 北東アジア地域研究拠点	自然環境と文化・文明の構造	池谷 和信
北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター	域内連携体制の構築をめざす国際関係論	岩下 明裕
東北大学 北東アジア研究センター	環境問題および地域資源に関する文化と政策	千葉 聡
富山大学 極東地域研究センター	持続的な経済開発	馬 駿
島根県立大学 北東アジア地域研究センター	思想・歴史のアイデンティティ	李 暁東
早稲田大学 総合研究機構現代中国研究所	中国と周辺地域—歴史的關係、華人マイグレーション、対中意識の変遷	青山 瑠妙



現代中東地域研究

中心テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして」

自然や社会、言語メディア環境等の地球規模の変動下で、中東地域の個人々々による情報の入手とその知識としての蓄積、資源としての活用に着目し、個人の再社会化とその相互作用の中に多元的価値を包摂／排除しながら共創される社会空間の実相を捉え直し、個から世界を構想する地域研究の新たな方法論を開拓します。

研究拠点	〔担当分野〕 研究テーマ	代表
【中心拠点】 国立民族学博物館 現代中東地域研究拠点	〔文化資源〕 個人空間の再世界化	西尾 哲夫
【副中心拠点】 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 中東イスラーム研究拠点	〔人的資源（制度的側面）〕 人間の移動・交流によるネットワークの構築	近藤 信彰
上智大学研究機構 イスラーム研究センター	〔人的資源（非制度的側面）〕 中東的な（公共）の多元的展開	赤堀 雅幸
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属 イスラーム地域研究センター	〔知的資源〕 穩健主流派の形成	東長 靖
秋田大学 国際資源学部	〔自然資源〕 環境問題と多元的資源観	藤井 光



南アジア地域研究

中心テーマ「グローバル化する南アジアの構造変動—持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究」

南アジア地域を対象として、文化、社会、政治、経済、自然、環境等の現代的動態と将来的展望を、学際的かつ長期的視点から解明することを目的とします。さらに、同地域の持続的、包摂的、平和的な発展に向けて、地域研究者ならではの俯瞰的で高度な知的貢献を通じ、諸問題の解決に寄与することを目指します。

研究拠点	研究テーマ	代表
【中心拠点】 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属 南アジア研究センター	南アジアの環境と政治	(総括代表) 藤田 幸一 (拠点代表) 藤倉 達郎
【副中心拠点】 国立民族学博物館 南アジア研究拠点	南アジアの文化と社会	三尾 稔
東京大学大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構南アジア研究センター	南アジアの経済発展と歴史変動	田辺 明生
広島大学 現代インド研究センター	南アジアの空間構造と開発問題	友澤 和夫
東京外国語大学 南アジア研究センター	南アジアの文学・社会運動・ジェンダー	粟屋 利江
龍谷大学 人間・科学・宗教総合研究センター 南アジア研究センター	南アジアの思想と価値の基層的变化	嵩 満也



日本関連在外資料調査研究・活用 在外日本資料

欧米にある日本関連資料の中には、現地の日本文化研究者の不足や個人所蔵であることから、所在情報や資料価値の掌握がされていない貴重な資料が多数存在します。本事業はこうした文書、音声、実物資料を含む多様な資料の調査研究を進めると同時に、その成果を国内外で活用し、海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進します。

ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用

—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—

代表：日高 薫（歴博）

ヨーロッパ各地に現存する19世紀日本関連資料の調査を実施し、データベース公開、展示、シンポジウム、教育プログラム等の方法により効果的に活用します。(1) ウィーン、(2) イギリス、(3) スイスにおいて、それぞれ異なるレベル（《資源基盤型》、《対話型》、《人材育成型》）の事業を現地の博物館・大学等との共同で展開することによって、日本・現地双方へ成果の還元を図るとともに、日本文化発信の国際連携モデル構築を目指します。



共同研究の成果に基づき、英国・ウェールズで行われた展示をご覧になるチャールズ皇太子（写真中央）

バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用

代表：太田 尚宏（国文研）

2011年、バチカン図書館で発見されたマリオ・マレガ神父収集の1万数千点の豊後切支丹関連文書を調査研究し、さらに同図書館での保存管理体制の構築支援やウェブサイトでの収集文書の公開を通じて、その学術的価値や可能性ならびに日本資料調査法について国内外に向けて情報発信します。



マレガ文書の修復ワークショップ

北米における日本関連在外資料調査研究・活用

—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—

代表：朝日 祥之（国語研）

ハワイを含む北米に移住した日本人に関わる音声・映像資料の中には、整備されずに劣化や廃棄リスクが高まっているものが多く存在します。これらのデータ救出と資料の評価を行うとともに、日系社会の歴史においてこれまで焦点化されてこなかった領域を析出した上で調査研究を行い、日系人の言語史・社会史・生活史を基とする新たな資料論の創出を目指します。



バーバラ＝カワカミ氏が収集した音声資料（ハワイ）

プロジェクト間連携による研究成果活用

代表：瀧井 一博（日研）

3つのプロジェクト間を連携して、異分野を融合した日本関連在外資料に関する研究集会や展示などを企画し、国内外での実施を推進します。調査研究の成果を活用した情報発信を通じて、国内外における次世代の若手日本研究者の育成を図り、国際連携のもとで比較研究を進め、日本文化の国際的相互理解を促進します。



プロジェクト間連携による国際シンポジウムの様子



歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業 歴史文化 NW 事業

地域の歴史文化資料は、その土地の成り立ちを知り、これからを考えるための道しるべとなるものであり、地域社会の長期的、持続的発展に欠かせません。大災害から地域の資料を救い出し、継承していく取組は、阪神・淡路大震災をきっかけに立ち上がった「歴史資料ネットワーク」を先駆けとして、全国各地に普及しつつあります。しかし、地域の資料を継承していく方法は、まだ制度的にも技術的にも確立していません。また、災害の増加に伴い、被災資料の保全は、ますます大きな課題となっています。

本事業は、機構（主導機関：歴博）、東北大学、神戸大学を中核として、全国各地の主に大学を中心に活動する「資料ネット」との連携構築を通じて、資料調査とデータ記録化、広域的相互支援体制の確立、資料保存研究等の歴史文化資料保全を推進します。さらに、資料を活用した研究や教育プログラム開発、国内外に向けた情報発信を通じて、地域社会における歴史文化の継承と創成を目指します。



東日本大震災における被災歴史文化資料の救済活動

総合情報発信センター（CIP）

人間文化にかかわる総合的学術研究資源をデジタル化することで、広く国内外の大学や研究者への活用を促進しています。また、機構の所蔵資料や研究者、研究成果などを国内外へ積極的に広報するとともに、社会との双方向的な連携を強化することで、研究成果の社会還元を推進しています。

広報部門

機構が保有する多彩で膨大な研究資源や人間文化に関する研究動向、成果などの情報を収集するとともに、それらを各種発行物、一般公開のシンポジウム、定期的なメディア懇談会、社会連携の推進などの情報発信、広報活動を通じて国内外の社会や研究者に還元しています。人間文化を学ぶこと、知ることの重要性を社会に提示し、真に豊かな人間生活の実現を目指します。

人文機構シンポジウム

機構に蓄積された人間文化にかかわる総合的研究資料や成果を広く社会に伝えるため、人文機構シンポジウムを開催しています。

メディア懇談会

人間文化研究の成果を迅速に社会に伝えるとともに、社会からの要請に応えた情報発信を実現するため、各種メディアの記者や編集者等との懇談会を、定期的に行っています。

- 2020年11月24日 「人間文化研究機構日本研究国際賞」
第2回受賞者のご紹介
- 2021年1月12日 人文知応援大会「コロナという災厄に立ち向かう人文知」の開催に向けた趣旨説明

社会連携

産業界や外部機関と連携し、研究成果の社会還元を推進するとともに、学術文化の進展に寄与します。

- 大手町アカデミア（一般社団法人 読売調査研究機構）における人文機構特別講座
2020年12月16日 連続講座：持続可能な「自然・社会・人間」の関係性を考察する（1）
「近世江戸は災害都市だった！ー連続複合災害について考えるー」
- 公益財団法人 味の素の文化センターとの共催シンポジウム
2020年11月24日 食のサステナビリティ
～未来につなぐ食のあり方を考える～
- 人文知応援フォーラムとの共催事業として、人文知の普及・推進のために大会を開催（人文知応援フォーラム <https://jinbunchi.or.jp/>）
2021年2月27日 第1回人文知応援大会
「コロナという災厄に立ち向かう人文知」



2020年度メディア懇談会



大手町アカデミア人文機構特別プログラム
「連続講座：持続可能な「自然・社会・人間」の関係性を考察する（1）」「近世江戸は災害都市だった！ー連続複合災害について考えるー」



公益財団法人 味の素の文化センターとの共催シンポジウム「食のサステナビリティ～未来につなぐ食のあり方を考える～」

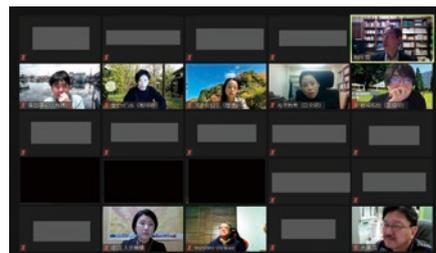
人文知コミュニケーター

<https://www.nihu.jp/ja/training/jinbunchi>

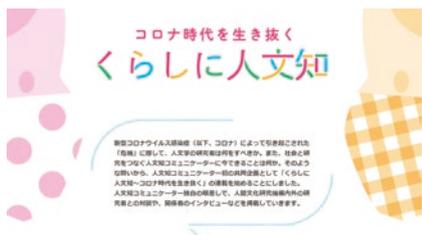


展示など多様な発信媒体、機会を活用して人間文化研究の成果をわかりやすく社会に伝えるとともに、研究に対する社会からの要望、反響を吸い上げ、研究現場に還元するスキルを有した研究者として、「人文知コミュニケーター」の組織的育成を行っています。社会と研究を「つなぐ人」として、社会連携や共創を推進し、人文学の振興、発展に貢献します。

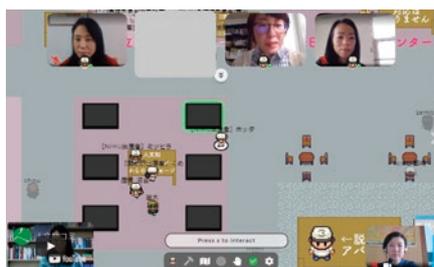
また、2018年度からは、筑波大学、国立科学博物館と連携し、筑波大学大学院にて「人文知コミュニケーション」を開講することで大学の研究教育機能強化を支援しています。



筑波大学大学院における連携講義「人文知コミュニケーション」(2020年10月31日、11月28日、オンライン)



人文知コミュニケーター連携企画「暮らしに人文知～コロナ時代を生き抜く」のウェブ連載を開始



大学共同利用機関シンポジウムにおける来場者との交流(2020年10月18日、オンライン)



桑汐里(人文知コミュニケーター)企画のオンラインイベント「国文学研究資料館×日本科学未来館和書からさぐる!お江戸のサイエンスとライブラリー」(2020年8月9日)

発行物

▶ NIHU Magazine

https://www.nihu.jp/ja/publication/nihu_magazine



機構の研究成果や活動などを国内外に向けて発信するウェブマガジン、NIHU Magazine(日本語と英語の2言語)を人文機構のウェブサイトから、定期的に発行しています。

2020年度の記事

- Vol.052 人文知コミュニケーターにインタビュー!
桑汐里(くめ しおり)さん
- Vol.053 人文知コミュニケーターにインタビュー!
大石侑香(おおいし ゆか)さん
- Vol.054 アンドルー・ゴードン教授が
第2回日本研究国際賞を受賞
- Vol.055 お家から人間文化研究機構:
コロナ時代に合わせた新しい形の講演会と展示
- Vol.056 人間文化研究機構・味の素食の文化センター共催
シンポジウム「食のサステナビリティ～未来につなぐ
食のあり方を考える～」
- Vol.057 歴史的・文化的資料を救え:
東日本大震災の教訓を生かした資料保存へ

- Vol.058 東日本大震災から10年:
資料の保全活動から見る福島の今
- Vol.059 第2回人間文化研究機構日本研究国際賞受賞記念
アンドルー・ゴードンハーバード大学教授インタビュー
- Vol.060 リーダーに聞く『西谷大 国立歴史民俗博物館新館長』
「近世江戸は災害都市だった!連続複合災害について
考える」(大手町アカデミア×人間文化研究機構一般
講演会)開催報告
- Vol.062 リーダーに聞く
『井上章一 国際日本文化研究センター新所長』
- Vol.063 コロナ禍におけるインド社会の女性

▶ 人文機構ニュースレター <https://www.nihu.jp/about/cip>



人文機構の展示やシンポジウム、各種イベント活動などの情報を定期的にメールで配信する「人文機構ニュースレター」を発行しています。「人文機構ニュースレター」の登録・解除は人文機構のウェブサイトをご覧ください。

Twitter / Facebook / YouTube

最新のイベント情報

Twitter …… <https://twitter.com/NIHUofficial>

Facebook … <https://www.facebook.com/NIHU.official>

シンポジウム等の動画配信

YouTube … <https://www.youtube.com/c/NihuJP>

情報部門

機構に蓄積された人間文化に関する多様な研究情報を統合的に検索、閲覧可能にする「研究者データベース」および「研究成果データベース」（機構リポジトリ）を構築、運用し共同利用基盤を拡充しています。また研究資源高度連携事業として、人間文化に関する研究資源の全国的・国際的な共用化を促進するための各種検索システムや解析ツールなどの構築、運用や、システムの利用、導入を推進する活動を実施しています。

研究資源のデータベース

データベースの種類	データベースの概要
研究成果データベース	機構6機関の研究論文をクラウド上で統合的に閲覧可能とする機構リポジトリ（国立情報学研究所のJAIRO Cloudにて運用しています）。
研究者データベース	機構全体の研究者情報を横断的に発見できる統合データベース。
高度連携システム （旧資源共有化システム）	機構6機関のデータベースを統合的に検索できると同時に、RDF化による他機関との連携を目指した統合システム。

高度連携システム

事業名	内 容
統合検索システム nihulNT	機構6機関および国会図書館・京都大学東南アジア地域研究研究所等のデータベースを統合的に検索可能（2021年3月末現在でデータベースは170以上、レコード数は550万以上）。
時空間システム GT-Map, GT-Time	シンプルに時間情報と空間情報を分析するための基礎ツール。GIS解析が可能。
歴史地名データ	歴史資料に現れる地名（歴史地名）から緯度・経度の情報を得るためのデータ
国際ポータル事業 国際リンク集	「日本研究および日本における人間文化研究の国際リンク集」。日本における人間文化資源情報を英語で説明し、国際的に発信するポータルサイト。



統合検索システム nihulNT
を紹介するフライヤー

人間文化研究情報資源共有化研究会

機構では、機構参加機関のデータベースの横断検索の発展のみならず、人間文化研究分野及び関連領域における学会全体での情報資源共有化の推進を提案しています。そこで、人間文化に関わる研究情報資源共有化の推進について、学会の皆様と意見交換し、さらに連携を進展させる機会を得るために、人間文化研究情報資源共有化研究会を開催しています。



第15回「人文系研究データの生成と管理—「可逆性」の実現のために」（日比谷図書文化館 2020年1月25日）

博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

可視化・高度化事業

機構の6機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や社会との共創により研究を高度化して新領域創成を図る研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築します。



移動型展示ユニット（モバイルミュージアム）を活用した機構内各機関の研究成果の可視化（日本科学未来館 大学共同利用機関シンポジウム）

国際連携

人間文化研究にかかわる諸外国の研究機関との研究協力関係を構築し、外国人研究者招へいや研究者の海外派遣を進めるとともに、海外での国際シンポジウムの開催、講師の派遣を積極的に推進しています。

また、英国の芸術・人文リサーチ・カウンシル（AHRC）との協定に基づき、日本研究を専攻する海外の大学院生・若手研究者を受け入れ、研究指導を行うなど、海外の研究者育成にも寄与しています。2020年度は新規2名の受け入れが決定しましたが、COVID-19の影響により、受入延期となっています。



シンポジウム「グローバル時代における人文学の日越協力」をベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学で開催（2019年11月）

海外研究機関との協定締結一覧

機関名	締結国・地域数	締結機関数	おもな相手機関名（国名）
機構本部	9	10	芸術・人文リサーチ・カウンシル（英国）／国際アジア研究所（オランダ）／バチカン図書館（バチカン市国）／サレジオ教皇庁立大学（イタリア）／モンゴル科学アカデミー（モンゴル）／フランス社会科学高等研究院（フランス）／東北師範大学東アジア研究院（中国）など
国立歴史民俗博物館	12	33	国立中央博物館（韓国）／中国社会科学院考古研究所（中国）／ルツェルン応用科学芸術大学アート・デザイン学部（スイス）／成功大学（台湾）／ボーフム・ルール大学（ドイツ）／アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（アメリカ）／バンドン工科大学（インドネシア）など
国文学研究資料館	10	19	コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所（フランス）／北京外国語大学北京日本学研究中心（中国）／ライデン大学人文学部（オランダ）／プリティッシュ・コロンビア大学文学部アジア研究学科（カナダ）／アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（アメリカ）など
国立国語研究所	9	14	オックスフォード大学人文科学部（英国）／中央研究院（台湾）／北京外国語大学北京日本学研究中心（中国）／ハワイ大学マノア校（米国）／オーストラリア科学アカデミー・デジタル人文学・文化遺産センター（オーストリア）／韓国日語教育学会（韓国）／韓国日本語學會（韓国）／ヨーク大学言語学科（英国）など
国際日本文化研究センター	7	9	ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 アジア・北アフリカ研究学科（イタリア）／清華大学人文・社会科学高等研究所（中国）／ハーグ国立文書館（オランダ）／ライデン大学文学部（オランダ）／北京外国語大学北京日本学研究中心（中国）／漢陽大学校日本学国際比較研究所（韓国）／ブリュッセル自由大学（ベルギー）／ロンドン大学 東洋アフリカ研究学院（SOAS）（英国）／日仏会館・フランス国立日本研究所（フランス）
総合地球環境学研究所	13	24	インドネシア科学院（インドネシア）／スルタン・カーブース大学（オマーン）／ザンビア大学（ザンビア）／北京大学（中国）／サスティナビリティ研究所（ドイツ）／カリフォルニア大学パークレー校（米国）／ラオス保健省国立熱帯医学・公衆衛生研究所（ラオス）／国際応用システム分析研究所（オーストリア）／ユトレヒト大学持続可能な発展に関するコペルニクス研究所（オランダ）／海南省疾病予防管理センター・海南省予防医学会（中国）など
国立民族学博物館	17	23	国立サン・マルコス大学（ペルー）／中国社会科学院民族学・人類学研究所（中国）／エジンバラ大学（英国）／国立民俗博物館（韓国）／北アリゾナ博物館（米国）など

（2021年4月1日現在）

※機構本部および機関単位で協定書を締結しているものに限る。研究者個人や研究室単位での共同研究等は含みません。

海外研究拠点

機構の国際的な共同研究を推進する拠点として、および日本研究、日本文化の海外発信を強力に推進する拠点として、海外研究拠点（リエゾンオフィス）の設置を推進しています。

2016年7月 モンゴル科学アカデミー歴史考古学研究所

2016年10月 フランス社会科学高等研究院

2018年7月 東北師範大学東アジア研究院



東北師範大学におけるリエゾンオフィス開所の様子

人間文化研究機構日本研究国際賞

「人間文化研究機構日本研究国際賞」（NIHU International Prize in Japanese Studies）は、一般財団法人クラレ財団の協力のもと、日本研究の国際的発展と日本文化の理解を深め広めることをめざして、2019年1月に創設しました。この賞は、海外を拠点として、日本に関する文学、言語、歴史、民俗、民族、環境などの人間文化研究において学術上とくに優れた成果を上げ、日本研究の国際的発展に多大な貢献をした研究者を、受賞の対象としています。第2回の日本研究国際賞は、ハーバード大学リー&ジュリエット基金歴史学部教授・ハーバード大学ライシャワー日本研究所教授のアンドルー・ゴードン（Andrew Gordon）氏が受賞しました。授賞式は2021年6月10日にオンラインで開催され、終了後にゴードン氏による記念講演「歴史の魅力と歴史学の責任」が行われました。



第2回日本研究国際賞授賞式の様子：ゴードン氏はアメリカからオンラインで出席した

大学院教育／共同利用・共同研究

総合研究大学院大学

国立大学法人総合研究大学院大学（総研大）の基盤機関として、文化科学研究科に4つの機関が各機関の特色を生かした5つの専攻（博士後期課程）を設置し、高い専門性と広い視野を持った研究者を養成しています。

	研究科	専攻	機関	学生数 (2020年 5月1日現在)	学位取得人数 (2019年度)
後期3年 博士課程	文化科学	地域文化学	国立民族学博物館	17 (7)	1
		比較文化学	国立民族学博物館	15 (6)	2
		国際日本研究	国際日本文化研究センター	21 (9)	3
		日本歴史研究	国立歴史民俗博物館	10 (0)	2
		日本文学研究	国文学研究資料館	9 (0)	0
			計	72 (22)	8

(2020年5月1日現在)

(単位：人)
(カッコ内は留学生で内数)



身近にある所蔵資料を利用した講義風景



大学演習室での論文ゼミの様子

特別共同利用研究員

国公立大学の要請に応じ、大学院生（博士課程または修士課程）で人間文化の研究分野を専攻する学生を特別共同利用研究員として受け入れています。各機関の研究施設や設備、資料、文献等をそれぞれの責任者の許可を得て利用することができるほか、各機関の研究者から研究指導を受けることができます。受入期間は、原則として1年間です。

特別共同利用研究員数						
国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国立国語研究所	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
1	6	3	5	4	2	21

(2020年度)

(単位：人)

大学、大学院教育への貢献

各大学との連携協定に基づき、大学院生の受け入れ、研究指導、授業科目の担当、学位授与審査への参加など、大学院教育に貢献しています（連携大学院）。また、国立歴史民俗博物館および国立民族学博物館は、展示や館蔵資料を大学における講義・演習での利用に供しているほか、国文学研究資料館では、施設内のゼミ室で豊富な所蔵資料を授業に利用できるプログラム「国文研でゼミを」を実施しています。

各機関の連携大学院

- 国立歴史民俗博物館 千葉大学
- 国立国語研究所 一橋大学、東京外国語大学
- 総合地球環境学研究所 名古屋大学、東北大学

共同利用・共同研究

機構の各機関は、全国の大学等では個別に収集し得ない各専門分野における膨大な研究資料やデータベース、実験施設を有しています。所蔵資料の他機関への貸出しや機構外研究者による資料調査、大学におけるゼミなどにも利用されるなど、国内外の研究機関・研究者の共同利用・共同研究に供しています。



年代実験室の真空ライン装置（歴博）



閲覧室内（国文研）

共同研究の件数および共同研究員数

機関名	共同研究 件数	総数(人)	国立大学	大学共同 利用機関	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
機構本部(研究推進センター)	10	756	217	124	30	205	59	20	70	31
国立歴史民俗博物館	56	354	112	6	12	87	58	25	39	15
国文学研究資料館	23	135	34	8	3	44	12	7	20	7
国立国語研究所	30	619	209	15	22	197	17	12	109	38
国際日本文化研究センター	18	637	183	15	22	254	18	14	82	49
総合地球環境学研究所	20	569	240	6	26	71	55	37	125	9
国立民族学博物館	59	456	137	19	20	146	52	12	51	19
複数機関 (I-URIC 機構間連携事業)	3	(※共同研究員数は、それぞれの受入機関に計上)								
(機構全体)	219	3526	1132	193	135	1004	271	127	496	168

(2020年度)

研究者の受け入れ

種別	国立歴史 民俗博物館	国文学研究 資料館	国立国語 研究所	国際日本文化 研究センター	総合地球 環境学研究所	国立民族学 博物館	計
日本学術振興会特別研究員	1	3	2	3	3	9	21
日本学術振興会外国人特別研究員	0	0	0	1	0	0	1
その他の外来研究員	0	11	2	23	3	87	126
外国人研究員招へい	1	0	0	12	2	3	18

(2020年度)

(単位：人)

研究プロジェクト

国内外の研究者と研究プロジェクトを組織して研究を行います。「共同研究」には、本館のミッションに基づいた研究課題のもとに学際的研究をめざす基幹研究(4件)と新しい歴史研究の方法論的基盤の形成を課題とする基盤研究(11件)、新規課題発掘と人材育成を目的とした開発型共同研究(1件)、大学院博士課程後期の大学院生やポストドクターなど若手研究者育成を目的とした共同利用型共同研究(8件)があります。また、所蔵資料を有効に利用するための「資料調査研究プロジェクト」(1件)と、企画展示、特集展示等の展示構築のため「展示プロジェクト」(17件)を実施しています(※実施件数は、いずれも2020年度実績)。

共同
利用

研究交流

国内外の大学等の研究機関と学術交流を図るため、2020年5月1日現在、61件の国際・国内交流協定を締結しています。

展示

総合展示では、日本の歴史と文化の中の重要なテーマを生活史に重点を置き、先史・古代から現代までを通して展示しています。共同研究や資料収集の成果を公開するため、企画展示と特集展示を、くらしの植物苑では伝統植物の特別企画を行っています。

資料収集

実物・複製資料・映像資料等を継続的に収集しており、2020年5月1日現在、270,938点(うち国宝5点、重要文化財87点、重要美術品27点)を収蔵しています。また、蔵書冊数は357,684冊です。

データベース

研究利用に資することを目的として、館蔵資料・文献目録・記録類全文のデータベース、および共同研究の成果を収録したデータベース等を広く公開・提供しています(2020年5月1日現在57本)。

日本の歴史・文化の研究を推進する研究機関

国立歴史民俗博物館(歴博)は、日本の歴史と文化に関する研究を推進するために設置された博物館機能を有する大学共同利用機関です。未来を切り拓く歴史的展望の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解に寄与することを使命として、資源・研究・展示を有機的に連鎖させ積極的に共有・公開する研究スタイル(博物館型研究統合)を継続しつつ、国内外との研究者等との学際的な共同研究を行い、分野を超えた共同利用環境を構築することで、異分野融合による新たな歴史像の構築を推進していきます。



国立歴史民俗博物館

National Museum of Japanese History

シンポジウム・講演会

研究成果公開のため「国際シンポジウム」、「国際研究集会」、「歴博フォーラム」および「歴博講演会」等を開催しています。

社会
連携

出版物

『研究報告』、『年報』および総合誌『REKIHAKU』等の刊行をはじめ、ウェブサイト等の充実により様々な情報発信を行っています。

人文機構 基幹研究プロジェクト

■ 機関拠点型

「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」

■ 広領域連携型

地域文化の再構築 **[主導]** **[ユニット]**「地域における歴史文化研究拠点の構築」

総合書物学の構築 **[ユニット]**「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」

■ ネットワーク型

在外日本資料「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」



企画展示「昆布とミヨクー潮香るくらしの日韓比較文化誌—」
韓国国立民俗博物館での展示風景



2019年度総合資料学集中講義の様子
2020年度はオンデマンドで実施



ウィーン世界博物館における国際連携展示「明治の日本」会場風景

講習会

アーカイブズ・カレッジ

多様な史資料を取扱う専門的人材を養成するため、長期コース・短期コースをそれぞれ年1回開催します。

日本古典籍講習会

古典籍を所蔵する大学附属図書館、公私立図書館等の職員を対象として書誌学の専門知識や整理方法の技術修得を目的に研修を行います。

「ぶらっとこくぶんけん」

多摩地域における学術・文化の発展に関する事業を継続的に実施するために、国文学研究資料館を中心に各参加団体で構成するプラットフォーム「ぶらっとこくぶんけん」を設立しました。現在、企業・自治体等19団体が会員として参加しています。

「ないじえる芸術共創ラボ」

本館に所蔵されている豊富な古典籍を有効に発掘・活用し様々な活動を通じて、古典籍等の文化的資産を現在の社会のニーズに適した形で積極的に利活用し、国際的に日本文化を発信していきます。

社会
連携

出版物

- 国文学研究資料館紀要(文学研究篇、アーカイブズ研究篇)
- 英文オンラインジャーナル
“Studies in Japanese Literature and Culture”
- 共同研究成果報告書 ● シンポジウム報告書
- 調査研究報告 ● 史料目録
- 国際日本文学研究集會会議録
- 国文研ニュース ● ニュースレター ふみ

人文機構 基幹研究プロジェクト

■ 機関拠点型

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワークの構築」(歴史的典籍 NW 事業)

■ 広領域連携型

地域文化の再構築 【ユニット】「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的な研究」

総合書物学の構築 【主導】

エコヘルス 【ユニット】「アジアの中の日本古典籍—医学・理学・農学書を中心として—」

■ ネットワーク型

在外日本資料「パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用」

国文学研究資料館

National Institute of Japanese Literature



日本の古典籍を 豊かな知的資源として活用

国文学研究資料館(国文研)は、国内各地の日本文学とその関連資料を大規模に集積し、日本文学をはじめとする様々な分野の研究者の利用に供するとともに、それらに基づく先進的な共同研究を推進する日本文学の基盤的な総合研究機関です。創設以来40年以上にわたって培ってきた日本の古典籍に関する資料研究の蓄積を活かし、国内外の研究機関・研究者と連携し、日本の古典籍を豊かな知的資源として活用する、分野を横断した研究の創出に取り組みます。

資料収集・利用

日本文学および関連する原典資料(写本・版本・歴史資料など)を中心にデジタル画像などで収集し、閲覧室での閲覧・文献複写サービスや図書館間の相互利用制度による資料複写に供しています。また、資料の一部は、本館ウェブサイトから「新日本古典籍総合データベース」等によって公開しています。また、情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設人文学オープンデータ共同利用センターから「日本古典籍データセット」として作品毎に一括ダウンロードが可能となっている作品もあります。

共同
利用

公開データベース

各種データベースによる学術情報の提供を行っています(2021年4月1日現在で32件)。

展示室

資料の調査研究や共同研究等で出された成果をもとに展示しています。また特設コーナーでは、定期的に展示替えを行いながら、様々なテーマ展示を行っています。

大学支援「国文研でゼミを」

学部、大学院で行っている日本文学、日本史のゼミや講義を、本館の豊富な所蔵資料を手に取りながら、ゼミ室で行うプログラムです。

国際交流

国際日本文学研究集會、日本語の歴史的典籍国際研究集會、国際シンポジウム等を開催し、国内外研究者との交流、日本文学研究の国際化を促進しています。また、海外で活躍する研究者を招聘し、学術研究の場を提供しています。

コーパス・データベース

大量の言葉を電子化し詳細な検索・分析を可能にした、言葉のデータベースを「コーパス」と言います。国語研では『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『国語研日本語ウェブコーパス』などのコーパスを設計・構築し、言語研究だけではなく、情報処理産業（音声認識・機械翻訳等の技術開発）など多方面の共同利用に供しています。現在は、方言・歴史的な日本語・日常会話・学習者の日本語などの多様なコーパスの構築・公開を進めています。

また、1948年の創立から現在にいたるまで積み重ねられてきた調査データや文献情報などを、データベースとして公開しています。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書室で、日本語学・日本語教育・言語学等の研究文献・言語資料を収集・所蔵しています。

122件の結果が見つかりました。そのうち1件～50件を表示しています。

No.	文
1	<p>【大さな】</p> <p>【おぼろさまが】</p> <p>【どんぶらこ】</p> <p>【と】</p> <p>【川から】</p> <p>【洗れてき】</p> <p>【て】</p>

『国語研日本語ウェブコーパス』
(NWJC・約250億語規模)の検索
<https://bonten.ninjal.ac.jp/>



危機的状況にある言語・方言サミット
(奄美大会)・与論

イベントを通じた社会への発信

専門家向けの国際シンポジウムや講習会などを開催するとともに、様々な一般向けイベントを通じて、成果を発信しています。方言、日本語教育、近代語などのテーマを設定して行う講演会「NINJALフォーラム」や、国語研を会場とする一般公開イベント「ニホンゴ探検」「オープンハウス」などを開催するとともに、イベントの記録動画や日本語の研究についてやさしく解説した動画をウェブ上で配信しています。

日本の消滅危機言語・方言の研究

2009年にユネスコが発表した世界の消滅危機言語リストには、アイヌ語、琉球語、八丈語など日本国内の8つの言語・方言が含まれています。それらの8つの言語を中心に、日本各地の消滅の危機にある言語についての調査・研究を行い、また、地方自治体と連携してセミナーを開催するなど、地域社会の活性化、ことばと文化の継承を目的とした活動を行っています。

共同利用

日本の「ことば」の総合研究機関

国立国語研究所（国語研）は、日本語学・言語学・日本語教育研究の国際的・中核的研究拠点として、世界の諸言語の中で日本語が持つ特質や言語としての普遍性、日本語の多様性を総合的に明らかにしようとしています。

日本語研究の深化・国際化と新領域の開拓を促進するため、国内外の大学・研究機関と大規模な共同研究を展開するとともに、その成果として得られた言語研究資源を共同利用に提供しています。



国立国語研究所

National Institute for
Japanese Language and Linguistics

人文機構 基幹研究プロジェクト

■ 機関拠点型

「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」

■ 広領域連携型

地域文化の再構築 **[主導]** **[ユニット]**「方言の記録と継承による地域文化の再構築」

総合書物学の構築 **[ユニット]**「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」

■ ネットワーク型

在外日本資料「北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築一」



一般公開イベント
「ニホンゴ探検—
1日研究員になろう！」

「社会に開かれた研究機関」として、研究活動・研究協力活動により得られた成果を広く社会に還元するため、以下のような普及活動を行っています。

社会連携

講演会

- 日文講堂において、日文研の教員による研究成果の発表と日本研究の普及を目的として学術講演会を開催しています。
- 日文研で開催される国際研究集会の期間中に、普及活動・社会貢献の一環として、一般市民に向けた公開講演会を開催することもあります。
- 日文研に滞在中の外国人研究者による日本研究の成果を市民の皆さまにご紹介し、交流の一助となることを主な目的とする「日文研フォーラム」を1987年の設立以来、京都市中心部の会場で継続的に開催しています。

出版物

日本文化に関する最新の研究成果を発信する『日本研究』、*Japan Review* といった国際的な学術雑誌、および「日文研叢書」「Nichunken Monograph Series」などの学術研究成果出版物のほか、国内外で開催するシンポジウムなどの報告書を出版し、世界の研究機関に広く発信しています。

人文機構 基幹研究プロジェクト

■ 機関拠点型

「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」

■ 広領域連携型

総合書物学の構築 【ユニット】「文化・情報の結節点としての図像」

■ ネットワーク型

在外日本資料

「プロジェクト間連携による研究成果活用」



麻疹後の養生
【日文研所蔵】



井上所長による所内案内動画

国際日本文化研究センター

International Research Center for Japanese Studies



日本文化を研究し、世界に発信する国際的研究拠点

国際日本文化研究センター（日文研）は、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力を目的とした機関です。主な活動である共同研究では、日本文化について国際的視野からの異分野融合的なテーマを設定し、国内外から多様な専門分野の研究者が参加して研究を展開しています。また、毎年多くの海外研究者を受け入れるとともに、国際研究集会やフォーラム等を開催して学術交流や研究情報の収集・発信を行うなど日本文化研究の国際的拠点としての役割を担っています。

に
ち
ぶ
ん
け
ん

図書館

日本研究に必要な各種資料を幅広く収集し、研究者の利用に供するとともに、さまざまな情報提供に努めています。約58万冊の蔵書の所蔵状況はウェブで検索することができ、他大学図書館などからの文献複写や貸借の申込にも対応しています。資料収集の重点のひとつは、外国語で書かれた日本研究図書および訳書の網羅的収集です。図書資料だけでなく、幕末明治期の彩色写真、古地図、ビデオテープ・DVD・CDなどの映像音響資料も積極的に収集しています。

共同利用

データベース

所蔵する日本研究資料、所員の研究成果をはじめ、他機関所有の日本研究資料などのデータベースを作成しており、現在*43種類をウェブサイトで公開しています。
（*2021年4月1日現在）



図書館

異分野融合の国際共同研究

研究テーマを含む公募により、大型学際的国際共同研究プロジェクトを開発・実施し、日本全国の教育・研究機関及び海外の研究者コミュニティに文理融合研究の場を提供しています。専門分野の枠を超えた研究活動により、既存の学問体系では得られなかった新たな研究成果に繋がっています。

共同
利用

施設・機器

世界中の研究フィールドで得られた試料に眠る環境情報を取得・分析し、人間と自然系の相互作用環の姿を明らかにするための多種多様な実験装置を設けています。なかでも、国内有数の充実した安定同位体測定機器を利用した分析を軸とする新たな学問領域「同位体環境学」を牽引しており、広く国内外の研究者に研究・学習機会を提供するとともに、様々な分野の研究者が共同して進める環境研究を展開しています。



国内屈指の安定同位体の分析研究環境

データベース

「地球研アーカイブズ」は、研究成果をはじめとする地球研の活動記録（各種出版物や研究データ、報告書など）を収集・蓄積し、利用可能な形で次世代に残すための中心的な役割を果たしています。これらの情報資源を活用した解析手法や新たな研究シーズ発見のための研究開発を進めるとともに、全国の大学や研究機関との情報資源の共同利用を進めています。

社会と協働し地球環境の未来を 考える研究拠点

総合地球環境学研究所（地球研）は、地球環境問題を「人間humanity」と「自然nature」の関係の問題、つまり人間文化の問題ととらえ、解決に向けた総合的研究を行う研究所です。課題を明確にしたプログラムの下で、期間を定めて集中的に国内外の共同研究プロジェクトを実施しています。研究者コミュニティだけではなく、地域住民をはじめ、社会の多様なステークホルダーと協働することで、地球環境問題の解決に向けた超学際研究を推進し、「総合地球環境学」の構築をめざします。



ちきりゆけん



総合地球環境学研究所

Research Institute for Humanity and Nature

地域社会との協働

研究者だけではなく、広く社会の人々と協働し多様な考えや取組みを構築・実践するために、研究者コミュニティをはじめ、社会の多様なステークホルダー（利害関係者）と密に連携し、課題解決に繋がる超学際の研究を推進しています。

社会
連携

環境教育

2014年度から、京都府内外の様々な高校と連携して環境教育を実施しており、高校生の研究・成果発表の支援や小学校と高校が連携した授業の企画・実践などに取り組んでいます。このような活動を通じて、人材育成にも貢献しているほか、地球研独自の環境教育手法の開発も進めています。

セミナー・出版物

広く社会の人々に研究成果を発信するために、市民セミナーや地域連携セミナーを開催し、ソーシャルメディアを活用して世界に向けて成果を公開しています。また、研究所の動向や所員の研究活動などの最新情報を発信する機関誌「地球研ニュース」や、研究成果を一般向けに紹介する地球研叢書、研究者向けの和文・英文学術叢書などの学術出版物も刊行しています。

人文機構 基幹研究プロジェクト

■ 機関拠点型

「アジアの多様な自然・文化複合に基づく未来可能社会の創発」

■ 広領域連携型

地域文化の再構築 【ユニット】「災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生」

エコヘルス 【主導】【ユニット】「アジアにおける健康と環境：新たな人間と環境との関係性としての「エコヘルス」概念の再構築に向けて」



ザンビアでのワークショップ：自らサンプルを採取し、簡易処理している
(photo by Kataoka)

学術講演会

一般市民を対象とした講演会を開催しています。2020年度は、公開講演会「ファンタジーの挑戦——もうひとつの世界を想像しよう」「グローバル化する武道と中東」を実施しました。

社会連携

広報出版

『月刊みんぱく』『MINPAKU Anthropology Newsletter』などの定期刊行物、ならびに『国立民族学博物館展示案内』、特別展の展示図録や案内リーフレットなどを刊行しています。

「みんぱくゼミナール」 「みんぱくウィークエンド・サロン —研究者と話そう—

みんぱくの教員などが最新の研究成果を講演会などで紹介しています。

「みんぱく映画会」「研究公演」

世界の民族や文化の現代的問題に関する映像資料などの上映や、世界の諸民族の音楽や芸能などを紹介する研究公演を行っています。

人文機構 基幹研究プロジェクト

■ 機関拠点型

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

■ 広領域連携型

地域文化の再構築 **【ユニット】**「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」

エコヘルス **【ユニット】**「文明社会における食の布置」

■ ネットワーク型

地域研究・北東アジア **【中心拠点】**「自然環境と文化・文明の構造」

地域研究・現代中東 **【中心拠点】**「文化資源／個人空間の再世界化」

地域研究・南アジア **【副中心拠点】**「南アジアの文化と社会」



公開講演会「ファンタジーの挑戦——もうひとつの世界を想像しよう」



特別展「先住民の宝」

研究公演「阪神虎舞みんぱく公演」



国立民族学博物館

National Museum of Ethnology



世界についての 知の交流と創出の広場

国立民族学博物館(みんぱく)は、博物館機能と大学院教育の機能を備えた、文化人類学・民族学の大学共同利用機関です。国際的な研究・共同利用拠点として、世界各地の社会・文化についての調査・研究をおこなう一方、文化資源の集積と展示を通じたその情報の発信を国際的な連携のもとに進めています。集積された文化資源に関しては、オンライン上にも「フォーラム型情報ミュージアム」を構築し、それぞれの文化の担い手とも情報を共有・共同利用することで、新たな知の創出をはかっています。

みんぱく

収蔵資料

約34万点の標本資料および約7万点の映像・音響資料を収蔵し、研究や大学教育への活用および他の博物館への貸付や巡回展示など共同利用に供しています。

図書室

文化人類学とその関連分野の資料を収集している専門図書室です。日本語資料約27万冊および外国語資料約42万冊を所蔵。図書館間相互利用制度をとって文献複写・現物貸借を行っています。

データベース

標本資料や映像・音響資料、文献・図書資料などの目録情報をはじめ、「焼畑の世界」「津波の記憶を刻む文化遺産——寺社・石碑データベース」などをウェブサイトで公開しています。

展示

● 本館展示

世界を9地域に分けた地域展示と、音楽・言語の通文化展示を常設し、研究の進展に応じて展示を更新しています。

さらに、今日的な問題や先端の研究課題などを紹介する企画展示として、梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」(2020年9月3日～12月1日)を開催しました。

● 特別展示

特別展示は、特定のテーマに関する最新の研究成果を総合的・体系的に紹介する大規模な展示で、2020年秋には「先住民の宝」(2020年10月1日～12月15日)を開催しました。

● 共催展示

大学等と連携して館外で実施する共催展示として、京都大学総合博物館において「梅棹忠夫生誕100年記念 知的生産のフロンティア」(2021年1月13日～3月14日)、熊本県五木村の五木村歴史文化交流館において、「佐々木高明の見た焼畑——五木村から世界へ」(2020年10月3日～12月13日)を開催しました。

共同利用

機構役員等

平川 南	機構長
青山 宏夫	理事
岸上 伸啓	理事
永村 眞	理事
李 成市	理事（非常勤）
小泉 潤二	監事（非常勤）
二ノ宮隆雄	監事（非常勤）
大崎 仁	機構長特別顧問

各機関の長

西谷 大	国立歴史民俗博物館長
渡部 泰明	国文学研究資料館長
田窪 行則	国立国語研究所長
井上 章一	国際日本文化研究センター所長
山極 壽一	総合地球環境学研究所長
吉田 憲司	国立民族学博物館長

経営協議会

平川 南	機構長
青山 宏夫	理事
岸上 伸啓	理事
永村 眞	理事
李 成市	理事
西谷 大	国立歴史民俗博物館長
渡部 泰明	国文学研究資料館長
田窪 行則	国立国語研究所長
井上 章一	国際日本文化研究センター所長
山極 壽一	総合地球環境学研究所長
吉田 憲司	国立民族学博物館長
大原謙一郎	公益財団法人大原美術館名誉館長
弦間 明	資生堂特別顧問
小松 弥生	前埼玉県教育委員会教育長・ 元文部科学省研究振興局長
スヴェン サーラ	上智大学教授
佐村 知子	元内閣官房地方創生総括官補
武田佐知子	大阪大学名誉教授
永井多恵子	文化ジャーナリスト
長谷川眞理子	総合研究大学院大学長
長谷山 彰	慶應義塾大学名誉教授
広渡 清吾	東京大学名誉教授・ 公益財団法人日本学術協力財団副会長
藤岡 一郎	京都産業大学名誉教授
宮崎 恒二	東京外国語大学名誉教授
望月 規夫	讀賣テレビ放送株式会社顧問
山本 日出夫	事務局長

教育研究評議会

平川 南	機構長
青山 宏夫	理事
岸上 伸啓	理事
永村 眞	理事
西谷 大	国立歴史民俗博物館長
渡部 泰明	国文学研究資料館長
田窪 行則	国立国語研究所長
井上 章一	国際日本文化研究センター所長
山極 壽一	総合地球環境学研究所長
吉田 憲司	国立民族学博物館長
関沢まゆみ	国立歴史民俗博物館副館長
神作 研一	国文学研究資料館副館長
窪園 晴夫	国立国語研究所副所長
瀧井 一博	国際日本文化研究センター副所長
谷口 真人	総合地球環境学研究所副所長
平井京之介	国立民族学博物館副館長
荒木 敏夫	専修大学名誉教授
大塚柳太郎	自然環境研究センター理事長
酒井 啓子	千葉大学大学院社会科学研究院教授・ グローバル関係融合研究センター長
佐藤友美子	追手門学院大学地域創造学部教授
野家 啓一	東北大学名誉教授・ 立命館大学文学部客員教授
速水 洋子	京都大学東南アジア地域研究所長
三田村雅子	フェリス学院大学名誉教授
吉田 和彦	京都産業大学外国語学部客員教授

※各種委員会名簿は、人間文化研究機構のウェブサイトをご覧ください。
▶▶▶ <https://www.nihu.jp/ja/opendoor/committee/>

[データ一覧]

役職員数

機関	役員	館・所長	推進センター 研究員	研究教育 職員	特定有期 雇用職員	事務・技術職員		研究員	外国人 研究員	客員教員 (国内)	非常勤 研究員等
機構本部	7	0	31	0	4	32	(2)	0	0	0	0
国立歴史民俗博物館	0	1	0	38	2	46	(3)	0	0	12	6
国文学研究資料館	0	1	0	23	5	42	(1)	0	0	0	12
国立国語研究所	0	1	0	24	5	27	(2)	1	0	28	65
国際日本文化研究センター	0	1	0	20	6	37	(0)	0	6	10	10
総合地球環境学研究所	0	1	0	21	6	27	(0)	0	0	20	34
国立民族学博物館	0	1	0	48	5	51	(4)	0	1	19	10
計	7	6	31	174	33	262	(12)	1	7	89	137

(2020年5月1日現在)

※ () 内は再任用職員数で内数 (単位: 人)

予算

収入		金額	支出		金額
運営費交付金		11,652	業務費		12,407
施設整備費補助金		467	施設整備費		504
補助金等収入		168	補助金等		168
大学改革支援・学位授与機構施設費交付金		37	産学連携等研究経費および寄附金事業費等		354
自己収入		384			
産学連携等研究収入及び寄附金収入等		354			
目的積立金取崩		371			
計		13,433	計		13,433

(2021年度)

(単位: 百万円)

外部資金の受入れ

機関名	科学研究費		受託研究		寄附金		その他の外部資金		
	採択件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	
機構本部	2	(1)	2,210	0	0	2	6,510	1	4,188
国立歴史民俗博物館	32	(7)	135,070	3	1,800	19	2,415	5	12,398
国文学研究資料館	42	(15)	113,990	0	0	386	18,515	1	24,000
国立国語研究所	67	(19)	174,690	0	0	0	0	1	1,260
国際日本文化研究センター	21	(7)	49,700	0	0	7	26,776	1	1,000
総合地球環境学研究所	38	(13)	82,550	9	16,358	6	9,548	2	1,999
国立民族学博物館	82	(26)	227,740	0	0	5	7,070	3	137,250
計	284	(88)	785,950	12	18,158	425	70,834	14	182,095

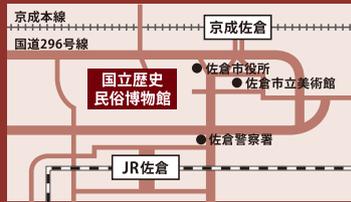
(2020年度)

(単位: 件、千円 カッコ内は新規分で内数)

国立歴史民俗博物館

〒285-8502
千葉県佐倉市内町117
TEL:043-486-0123(代表)
FAX:043-486-4209

【最寄り駅】
京成本線「京成佐倉駅」(徒歩15分)、JR「佐倉駅」→ちばグリーンバス(15分)「国立博物館入口」下車



国文学研究資料館

〒190-0014
東京都立川市緑町10-3
TEL:050-5533-2900(代表)
FAX:042-526-8604

【最寄り駅】
多摩都市モノレール「高松駅」(徒歩10分)、JR「立川駅」(徒歩25分)、JR「立川駅」北口バスのりば2番→立川バス「立川学術プラザ」下車(徒歩1分)



国立国語研究所

〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
TEL:0570-08-8595(代表)
FAX:042-540-4333

【最寄り駅】
多摩都市モノレール「高松駅」(徒歩7分)、JR「立川駅」(徒歩20分)、JR「立川駅」北口バスのりば2番→立川バス「立川学術プラザ」下車(徒歩1分)



国際日本文化研究センター

〒610-1192
京都府京都市西京区御陵大枝山町3-2
TEL:075-335-2222(代表)
FAX:075-335-2091

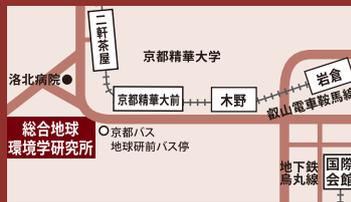
【最寄り駅】
阪急京都線「桂駅」→京都市バス(30分)「桂坂小学校前」下車(徒歩5分)
JR東海道本線「桂川駅」→ヤサカバス(30分)「花の舞公園前」下車(徒歩5分)



総合地球環境学研究所

〒603-8047
京都府京都市北区上賀茂本山457-4
TEL:075-707-2100(代表)
FAX:075-707-2106

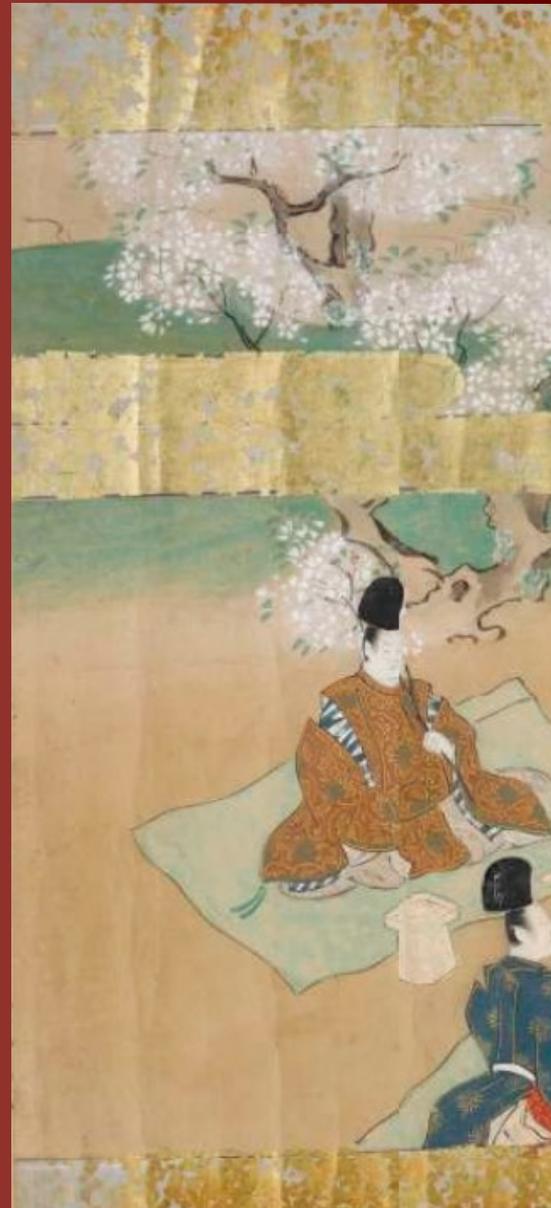
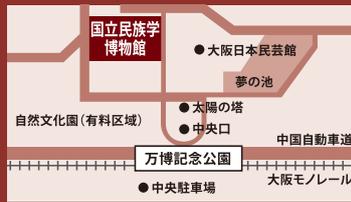
【最寄り駅】
地下鉄烏丸線「国際会館駅」→京都市バス(6分)「地球研前」下車
叡山電車鞍馬線「京都精華大前」(徒歩10分)



国立民族学博物館

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1
TEL:06-6876-2151(代表)
FAX:06-6875-0401

【最寄り駅】
大阪モノレール「万博記念公園」(徒歩15分)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構本部

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
ヒューリック神谷町ビル2F
TEL:03-6402-9200(代表)
FAX:03-6402-9240

【最寄り駅】
地下鉄日比谷線「神谷町駅」(出口4b徒歩2分)
地下鉄三田線「御成門駅」(出口A5徒歩10分)

Inter-University Research Institute Corporation
**National Institutes
for the Humanities**
Administrative Headquarters

2nd Floor, Hulic Kamiyacho Bldg.
4-3-13 Toranomon, Minato-ku,
Tokyo 105-0001 Japan
TEL: +81-3-6402-9200
FAX: +81-3-6402-9240
<https://www.nih.jp/>



この印刷物は、環境にやさしいベジタブルオイルインクを使用しています。

2021年6月発行